

紹介

岡村秀典著

『鏡が語る古代史』

銅鏡研究は日本の弥生・古墳時代研究において重要な位置を占めており、三角縁神獸鏡を代表に歴史的な評価が注視されてきた。一方、中国では鑑賞と銘文の読解に関心が払われ、本書も同様の立場をとっている。本書はおもに鏡の銘文に記された工人名を手掛かりに、時系列順に全八章で構成されている。以下では、三つに分けて紹介したい。

第一・二章は前漢以前を対象とする。第一章は導入にあたり、鏡の歴史、使い方、作り方、種類など鏡の源流と多様性に言及する。第二章は銘文に楚歌をもつ前漢鏡をとりあげる。当時は楚歌が流行しており、鏡の銘文にも採用された。内容は主従・恋愛関係、出征する夫に贈る歌など、人々との関係に焦点が当てられ、民間の人々の想いを楚歌に由来する抒情詩に託したと捉える。

第三・五章は前漢後期から後漢中期の官営工房と独立する工人について述べる。官営の「尚方」工房で鏡が製作されたが、新代は別に「王氏」「新家」といった銘文をもつ王莽の鏡も作られた。王莽の施策と功績を宣揚し、鏡をプロパガンダに利用したと主張する。また、尚方の鏡は次第にマンネリ化するため、「青蓋」工房が自立する。他にも個人鏡工が追隨するが、中でも「杜氏」は名工を自称した唯一の鏡工で、銘文に才能を発揮したと評価する。これらの工人は淮河流域に製作地が想定され淮派と呼ばれる。また、呉県に由来する呉派は凶像に特徴があり、『史記』『伍子胥』『韓朋賦』『貞夫』などを題材とした鏡を創作した。著者は新たに呉派が創作した画像鏡が淮派へと伝わり、「名工杜氏」が受けた衝撃を案じる。かつての名工も呉派の画像鏡に圧倒され、最後には模倣し、その獨創性を失ったと結論づける。

第六・八章は後漢後期から三国時代の神獸鏡の成立と展開について述べる。神獸鏡は神仙世界を表した鏡であり、中国各地に広がって継承された重要な鏡である。先ず、廣漢郡に由来する廣漢派の民間工房が尚方

委託のもと神獸鏡を創作し、後に、九子派と呼ばれる別工人によって江南地域へ拡散された。中でも江南の「張氏元公」は銘文から作鏡活動の足跡を辿ることができ、様々な神獸鏡を並行して製作していたと指摘する。三国時代の鏡は孫呉・曹魏によって政治利用され、三角縁神獸鏡も特注されたものであると位置づける。なかでも、「景初三年」三角縁神獸鏡をめぐり、洛陽発見の画紋帯神獸鏡が有力なモデルであること、三角縁神獸鏡は王侯クラスに送る特別な大きさであることなどから卑弥呼の「銅鏡百枚」はこの年に作られた三角縁神獸鏡であると比定し、本書で述べた鑄鏡体制の変化や三角縁神獸鏡の銘文にみえる鏡工の存在から、三角縁神獸鏡は政権から発注された民間工房で分担して生産されたとする。

著者の前著『三角縁神獸鏡の時代』（吉川弘文館、一九九九年）でも同時期の鏡を扱うが、本書の内容とは大きく異なる。というのも、本書は近年、著者が主宰した京都大学人文科学研究所の共同研究「中国古鏡の研究」班の成果をわかり易くまとめたものであり、前著から二〇年近く経ち、研

究に対する姿勢は大きく変わっている。あとがきでもふれているように、遺物を機械的に分類する型式学とは決別し、鏡工の生きざまを描こうとした「人間の考古学」を指摘したことが本書の大きな特色である。日本考古学の型式学重視の姿勢へも一石を投じるものとなろう。

（新書判 二四四頁 二〇一七年五月）

岩波新書（新赤版） 税別八六〇円）

（馬淵一輝 京都大学大学院文学研究科

博士後期課程）